

尺八と民謡、その可能性を求めて

「尺八奏者」小湊昭尚さん

民謡小湊流家元の
長男として生まれた

小湊昭尚さんは、師匠である父から民謡の稽古を受け、5歳から舞台に立った。10代から尺八の先生に師事して古典尺八奏法を学び、20代前半から尺八奏者として幅広い活動を展開している。洋楽とのセッション、和楽器デュオや尺八の合奏グループなど複数の活動を並行して展開し、新たな境地を拓く小湊さんは、尺八や民謡とどのように向かい合ってきたのか。そして海外公演に挑む心境、日本の伝統文化に対する思いとは――。

PROFILE

小湊昭尚 | こみなと あきひさ

1978年、福島県出身。民謡小湊流家元の長男として生まれる。父は民謡歌手の小湊美鶴。姉は歌手の小湊美和。4歳より両親の手ほどきを受け、舞台活動を開始。11歳から琴古(きんこ)流の古典尺八奏法を学び、1995年より人間国宝・山口五郎(故人)に師事。20歳で民謡小湊流三代目を継ぐ。東京藝術大学音楽学部邦楽科尺八専攻卒業後、純邦楽はもちろん、フュージョン、ボサノヴァなど洋楽とのセッションを開始。民謡や尺八演奏で身につけた技術でZAN(ザン)のヴォーカル、尺八奏者として新たな道を切り開き、AEKA(アエカ)、Priest(プリースト)、般若帝国など複数のユニットで活動を展開中。海外公演も積極的に行っている。

民謡小湊流家元の 長男として生まれて

近年、三味線や和太鼓、尺八など、純邦楽の奏法を身につけた和楽器奏者が脚光をあびている。中心になっているのは20~30代だ。彼らは古典の再現だけでなく、現代的な「和」の音楽も聴かせてくれる。尺八奏者の小湊昭尚さんは、そんな担い手の一人である。

「尺八は音色や音圧を自在に変えて、いろんな演奏ができる楽器。もっと聴いてもらえる機会を作り、リスナーには『尺八ってこんなに豊かな音色が出るんだ』といった、いい意味での裏切りを与えたい。邦楽という固まったブロックを一個一個叩き壊していきたい」

そう語る小湊さんは現在、四つのユニットに参加し、尺八とヴォーカルを担っている。そのうちのひとつ、和楽器グループZANで2004年、メジャーデビューを果たした。

民謡小湊流家元の長男として福島県須賀川市で生まれた。

「両親は舞台や稽古などで外出していることが多く、稽古以外で口をきいたことがありませんでした。しかも稽古では、師匠と弟子の関係。自分の家が他の家と違うと感じたのは小学校に入ってから。それまで自分が舞台に立つことを特別だとは思いませんでした。姉(小湊美和)の存在が大きかったですね。姉は民謡が好きで、僕より先に舞台に立っていたので、それをまねるように一緒に舞台に立っていたんです」

師匠、つまり父親はとてつもなく厳しかったという。

「稽古で殴られた記憶はあるが、親に甘えた記憶はないですね。稽古はやりたくなかったけど、やらないと自分の存在が認められなかったし、親とコミュニケーションが取れるのが民謡だけだったので、好きではないけど一生懸命続けました」

小湊さんには、多くのコンプレックスがあった。「他の家とは親子関係が違う。無理やり芸事を学ばされている。民謡の稽古をしているというだけでクラスの中で浮いてしまう。簡単にいえば、いじめの対象になるんです」

自身の才能に対する劣等感も大きかった。「小学校5年生の時に出場した民謡大会で3位になりました。これは小湊家ではアウト。いきなりゲームセットといった感じでした。親から『音楽の才能がまったくない』『そんな子はうちの子ではない』とさえ言われました。一方で姉は民謡大会に出場する度に最年少優秀賞受賞。好きで民謡を始めた姉と、嫌々続けてきた自分との違いを痛感し、大きな挫折感を味わいました」

17歳で人間国宝に師事し、 大学卒業後プロの道へ

11歳から古典尺八(※1)を習わされた。福島県内の先生のもとに通い、週一回2時間のレッスンを受けた。そして17歳の時、人間国宝の尺八奏者、山口五郎氏(※2)に師事した。

「これも親父の策略です。五郎先生は、福島県で僕が習った尺八の先生の師匠でした。地元の先生に学び、実力をつけてから、次に最高位の先生に師事するというルールを父が敷いて

いたようです」

人間国宝に師事し、初めて尺八の魅力にふれた。

「もともと尺八は楽器ではなく、虚無僧(こむそう)が身につけていた法器(※3)だったので、大事なのは精神面。一人になって眼をつむり、尺八を吹いて内面の宇宙を広めていく…。僕は五郎先生の音楽にふれた時に尺八のおもしろさをやっと感じることができました。音楽のことはよくわからなくても、五郎先生はなんだか凄いいいことだけはわかりました」

人間国宝の尺八演奏家は、何がどう凄く、凡庸な奏者とどこが異なるのだろうか。

「それを表現できれば、近道が見えるんですが(笑)。人間国宝クラスの先生は教科書どおりの演奏はしません。綿密に構築されているように見えますが、微妙にリズムをゆがませていくような難しいテクニックを体得し、特殊な音楽センスを宿しているんです」

やがて東京藝術大学音楽学部邦楽科に入学した小湊さんは、そこで邦楽に挑んでいる同年代に出会う。

「10代で邦楽の道を目指している人がいるなんて思いもよらなかった(笑)。そして初めてやる気が出ました。『同年代の者には負けたくない』という気持ちが芽生えたんです」

自身を追い込むように古典尺八を学んだ。その頃、尺八奏者として生きることを決意し、卒業後、プロの道を目指した。知人を介して少しずつ仕事の依頼が来るようになった。純邦楽の公演もあったが、洋楽とコラボレーションする機会も増えていった。

DISC

ZAN [絆]

ニューヨークでの活動を始めた和楽器デュオZANのサードアルバム+DVD



Priest [まほらの月]

小湊美和と小湊昭尚の姉弟ユニット Priestのファーストアルバム



AEKA [PASSING BY]

ギターと尺八のユニットAEKA。全曲オリジナルのセカンドアルバム



般若帝國 [完全犯罪]

尺八奏者3名から成る尺八アンサンブル般若帝国のファーストアルバム



WEB

ZAN公式サイト

<http://www.rhythmzone.net/zan/index.html>

箏奏者・市川慎(生田流清絃会四代目)と小湊昭尚の和楽器デュオZANのサイト

コミナト公式サイト

<http://www.kominato.com/>
小湊美和、小湊昭尚の姉弟ユニット Priest(プリースト)の総合サイト

AEKA公式サイト

<http://members.jcom.home.ne.jp/aeika/index.html>
ギターの高橋新と小湊昭尚のユニット AEKAのサイト

般若帝國公式サイト

http://www.geocities.jp/hannya_iteikoku/
小湊昭尚、元永拓、岩田卓也による尺八アンサンブルグループ般若帝國のサイト

多くの日本人が日本固有の文化を世界に
伝える術を持たないというのは残念です。
僕は仲間と一緒に和楽器を使った音楽で
それを伝えていきたいんです。



「親父のことをずっとムチャクチャな人だと思ってました」と笑う小湊さん。

「洋楽と尺八がコラボすることがこんなに自然なことなのかと肌で感じました。これが今日の仕事につながっています」

海外での活動と原点回帰、小湊流の民謡の表現

2004年から海外での活動も開始した。日本の伝統楽器の奏者だからといって、ことさら「和」を演出することはない。

「そもそも演奏しているのが現代音楽なので、和洋のジャンルとは無関係なのですが、尺八を吹くだけで『和』だと思います。そして『尺八の音色は凄い』『こんな音楽があるのか』といった感想を耳にし、手ごたえをつかんできました。日本の匠の技がそのクオリティにおいて欧米市場で『エクセレント』と賞賛されるように、尺八もまた世界中のリリスナーに認められる可能性を秘めています。ただ海外で成功して逆輸入されるまでには、日本である程度の基盤を作らなければいけません。僕はそれを30代でやろうと思っています」

尺八の魅力や技法を語れば、話は尽きない。「僕にとっての和楽器はとても人間っぽいもの。出しやすい音と出にくい音があることも、いろんな表現ができることもできないことも、どれもこれも人間らしい。だから言葉を超えて奏者の気持ちが伝わっていくんじゃないでしょうか。」

古典も発表された時は新曲でした。伝統を練りあげ、常に形を変えてきたからこそ今日が

ある。現代風に形を変えて届けていけば、耳の肥えた人ばかりでなく、一般のリリスナーにももっと聴いてもらえるのではないかと思っています」

そのまなざしは原点回帰ともいべき民謡にも向けられている。二十歳の時に民謡小湊流三代目を襲名した。小湊家の仕事以外では使わないが、家元には小湊法笙(ほうしょう)の名がある。

「小湊法笙としては修行中なので、これからは月に一度、実家に戻り、稽古場をまわられるようにしたい」

今秋から津軽三味線、和太鼓、尺八のユニットSUN蕊(さんずい)(※4)の活動も始めた。

「子どもの頃から古典尺八を学んできたので、このあたりで民謡尺八(※5)に戻って小湊流の民謡の表現を試みたいという気持ちもありました。民謡の仲間とグループを組んだのは、三人だけでいろんな場所で民謡をアピールしたいと思ったからです」

民謡の未来と後継者にも気持ちが及ぶようになった。

「今の子どもたちが民謡を始めたいと思っても、友だちに『ダサイ』とか言われて、いじめられたんじゃないかな。スポーツと違って民謡にははたどり着く前に大きな壁があるので、その体験者である僕らがイメージを変えていきたい。民謡も尺八もカッコいいと思わせたいんです」

伝統文化を守る使命感が生まれたのだろうか。「民謡は他の邦楽や洋楽と比較して技術の

平均値が低いんです。もしかしら民謡は将来なくなるかもしれない。民謡の家元の家に生まれたからでしょうか、民謡を伝える使命感みたいなものはあります。守るといふより、小湊流として再構築したい。そう考えることは親父の狙いどおりになったようで悔しいですが、いずれスタートラインに戻っていくのかもしれない」

小湊さんは最後に日本文化にふれ、次のように語った。

「僕はたまたま和楽器や民謡をやってきたから、海外で日本文化を説明する際に困ったことは一度もありません。でも、多くの日本人が日本固有の文化を世界に伝える術を持たないというのは残念です。僕は仲間と一緒に和楽器を使った音楽でそれを伝えていきたいんです」

小湊さんがどんな未来を切り拓き、どんな音楽を奏でってくれるのか。これから多くの人が見守っていくことだろう。

Text by: 綾瀬良太

※1 虚無僧尺八を源流に持つ「本曲」と呼ばれる伝統的な尺八の独奏または二重奏。中世から江戸時代に作られた楽曲で、江戸時代に初代黒沢琴古(きんこ)がまとめたものは「琴古流本曲」と呼ばれている。

※2 尺八の二大流派のうちのひとつ、琴古流を代表する演奏家。邦楽界にあって最年少で重要無形文化財保持者(人間国宝)の認定を受けた重鎮であった。東京藝術大学音楽学部邦楽科の教授も務めていた。1998年逝去。

※3 禅宗の善化宗(ふけしゅう)に属する虚無僧が托鉢の際に用いたことから尺八は宗教上の道具、装飾品の一部であった。

※4 津軽三味線福居流の福居一大、美濃流唯子方の美濃直三郎と小湊昭尚から成る和楽器ユニット。

※5 伝承される曲の独奏や二重奏である古典尺八に対し、民謡歌唱の伴奏を担うものは「民謡尺八」と呼ばれる。